

広報

はちまんたい
hachimantai3
Mar.2015
別冊暮らしとともに生きる信頼の漆器
安比塗をもっと身边に

八幡平市の代表的な工芸品のひとつ「安比塗」。流行に左右されないシンプルな形と、日常使いできる丈夫さ、修理できる安心感を兼ね備えた信頼の漆器を、皆さんの暮らしの中に取り入れてみませんか。



八幡平黒谷地温原を源流とする安比川



酒を杯に注ぐための伝統的な酒器「片口」。安比塗のロゴマークにもなっています

八幡平黒谷地温原を源流とし、馬淵川に注ぐ安比川。かつてこの流域では、豊富な森林資源を生かした漆器生産が盛んに行われていました。その起源は古く、天台寺開創の際、僧侶が寺の食器として製作したもののが広まつたと伝わっています。冷涼で稲作に適さないこの一帯で、漆器作りは重要ななりわいであり、藩へ年貢の代わりに納められるほどでした。安比川上流の細野地区で原木を切り出し、川を少し下った畠地区を中心にして各地へ広まっていきました。

明治期以降は荒沢漆器と呼ばれ、隆盛は昭和初期まで続きましたが、時代の変遷とともに瀬戸物やプラスチックが市場を席巻し、この地域の漆器生産は衰退していきました。

しかし、荒沢の漆器文化を後世へ伝えるため、昭和58年に安代町漆器センター（現・八幡平市安代漆工技術研究センター）を設立。伝統に新しい息吹を吹き込んだ「安比塗」として、現代の暮らしの中によみがえらせたのです。

八幡平黒谷地温原を源流とし、馬淵川に注ぐ安比川。かつてこの流域では、豊富な森林資源を生かした漆器生産が盛んに行れていました。その起源は古く、天台寺開創の際、僧侶が寺の食器として製作したものが広まつたと伝わっています。冷涼で稲作に適さないこの一帯で、漆器作りは重要ななりわいであり、藩へ年貢の代わりに納められるほどでした。安比川上流の細野地区で原木を切り出し、川を少し下った畠地区を中心にして各地へ広まっていきました。

漆器産地「安比川流域」の歴史

職人の手による、新しい伝統づくり

安比川流域の漆器生産の伝統を今に伝える安比塗。上質な漆器を生み出すため、試行錯誤を繰り返して生まれました。

「永遠の定番」を目指して

安比塗の製作には、岩手県工業試験場（現・県工業技術センター）が深く関わり、漆本来の特性を生かした技法を確立しました。

すべて天然木を使用し、木を縦に使って木取りしています。縦木取りは、大きく太い木が必要で、加工が難しいものの、丈夫で割れにくく、ゆがみの少ない器を作ることができます。

お椀などの原型は、地域に残された古い椀などを計測して平均化し、いい部分をかけ合わせて作りました。

現代の暮らしにもすんなり溶け込み、長く使うことで経年変化の深みが増します。伝統と洗練を掛け合せ、食卓の「永遠の定番」を目指しています。

安比塗の製作には、岩手県工業試験場（現・県工業技術センター）が深く関わり、漆本来の特性を生かした技法を確立しました。



研究から生まれた最適な工程

浅沢地区の塗りの伝統を今に伝えられる安比塗。一番のこだわりは何といつても、漆にあります。

漆本来の特性を生かすため、地域に伝わる技術を数値化して客観的に分析し、最適な漆の精製技術、塗り

の回数などを編み出しました。漆の精製の仕方により、光沢や粘度が変わり、仕上がりに影響が出るため、

紙」を活用したワークショップを併催し、安比塗の魅力を体感していました。

ことし1月には、同中央区銀座にある岩手のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」で、「わしの屋」の酒とともに楽しむ「ぬぐだまるいわて酒」とうつわの手仕事展」に出展。全国各地の有名デパートの催事などにも出展し、高い評価を得ています。

全国各地で展示会を開催



「monova」で開催されたワークショップの様子。こし紙を使って、絵が飛び出るポップアップカードを作りました

ねる「漆下地」。漆は時間がたつにつれ硬くなる性質があるので、木地に漆をたっぷりと染み込ませ、漆を何度も塗り重ねることで、丈夫な器を仕立てます。

上質な漆器を生み出すために、度重なる分析と実践を経て誕生した安比塗。信頼の技術は、将来にわたり安心してお使いいただける漆器の証です。およそ52工程、すべて職人の手仕事で仕上げます。

時間をかけて、艶を育てる器

熟練の技術が求められる上塗り

は、限られた職人が専用の部屋で行います。「塗り立て」と呼ばれる仕上げの手法により、漆そのものの質感が際立つ、安比塗独特の奥ゆかしい輝きが生まれます。毎日使い込むことで表面が磨かれ、漆がさらに硬くなつて、やがて美しい艶のある器へと育つのです。

長年使い込まれて漆器の艶が増すことを、「艶があがる」といいます。毎日の暮らしの中で、ゆっくりと輝きが育つ安比塗。日々の思い出とともに艶をまとい、使う人にとっての「特別な器」となります。

「艶があがる」とは？

新品の安比塗には表面に非常に細かな凹凸があり、真珠のような柔らかな質感があります。毎日使い続けていくことで、鏡のような光沢が生まれてきます。溜塗りの漆器の場合、上塗りが徐々に薄くなり、茶色みを帯びてくる点も魅力です。



新品の安比塗



長年使用した安比塗



市役所新庁舎の市長室のテーブルは、安比塗漆器工房製。一枚板を拭き漆で仕上げた、格調高い特注品

職人技を支えるセンター

安比川流域の漆器文化を継承するため、昭和58年に開設した安代漆工技術研究センター。2年間で漆器に関する実践的な指導を行い、漆器職人を育成しています。漆芸家を目指す若手のための貴重な研修機関であり、理論的な指導法とその教育水準が高く評価され、漆産業全体に大きく貢献しています。開設以来、60人の卒業生が、漆器職人として県内外で活躍しています。

安比塗漆器工房の塗師の多くは、このセンターの卒業生。センターの指導者と連携しながら、日々技術の研さんと励み、アフターサービスの対応や特注品の製作など、幅広いニーズに対応しています。



安代漆工技術研究センターでの研修の様子



汁椀4寸。いつものお味噌汁が、グンとおいしくいただけそうです

安比塗のお椀いろいろ



■汁椀4寸

使いやすさが人気の定番商品。少し小さめで、女性やお子さまも使いやすい3.8寸の汁椀もあります。

- ・材質／ミズメザクラ
- ・サイズ／径120^{ミリ}×高さ71^{ミリ}
- ・価格／7,020円

■4寸羽反椀

口が反り返っているため、汁物も飲みやすい形状。収納性に優れ、場所を取りません。

- ・材質／トチ
- ・サイズ／径120^{ミリ}×高さ63^{ミリ}
- ・価格／7,020円



■高台椀

高台が高く、持ちやすい形。風格ある佇まいでの首都圏の販売会でも人気の高い器です。

- ・材質／トチ
- ・サイズ／径120^{ミリ}×高さ80^{ミリ}
- ・価格／7,776円



安比塗を、見て、触れて、体験しよう！

市役所新庁舎隣の「結のひろば」に、安比塗の展示コーナーを設置しました。汁椀や片口など、安比塗の定番商品を見ることができます。お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

安比塗漆器工房では、安比塗をはじめ、県内外の漆芸作家の作品を展示しているほか、「漆の絵付け体験」ができます（要予約）。また、ご自宅にある古い漆器の修理なども承っています。詳しく述べは、工房へ問い合わせください。

■問い合わせ先／安比塗漆器工房

〒028-75033

岩手県八幡平市沢田230-1

TEL／0195-63-1065

FAX／0195-63-1066

営業時間／午前10時～午後6時
定休日／毎週日

安比塗の器を日々の暮らしに

暮らしの中にひとつずつ、安比塗の器を取り入れてみませんか？

軽くて丈夫な安比塗は、普段使いにぴったりの器。安比塗の器を暮らしに取り入れるなら、まずは汁椀を使ってみませんか。安比塗の器の色は、朱と溜の2種類。汁椀には定番の形がいくつかあるので、家族で好みの形を選ぶことができます。

「漆器は何となく敷居が高く、扱いが難しそう」と思っていませんか？ いえいえ、簡単なお手入れのコツさえ分かれば、一生使える大切な器となります。結婚祝いなど贈答品にもお勧め。地元の工芸品を、見て、触れて、愛用してみませんか。

はじめての安比塗、まずは汁椀から

安比塗の器を暮らしに取り入れるなら、まずは汁椀を使ってみませんか。安比塗の器の色は、朱と溜の2種類。汁椀には定番の形がいくつかあるので、家族で好みの形を選ぶことができます。

毎日のお手入れのコツ

洗う

食器用洗剤を柔らかいスポンジにつけて普通に洗ってOKです。たわしや硬いスポンジは避けてください。



拭く

洗ったあとは、柔らかい布で水滴を拭き取ります。毎日のひと手間が、艶のある器を育てるコツです。



「結のひろば」の安比塗展示コーナー